祢軍墓誌の碑文解釈　2011/12/10

＜はじめに＞

朝日新聞（2011年10月23日）のネット記事を下記に抜粋します。

「中国の古都・西安で見つかった墓誌（故人の事績を刻んで墓に収めた石板）に、「日本」との文字があることを紹介する論文が中国で発表された。墓誌は678年の作と考えられるとしている。日本と名乗るようになったのはいつからなのかは古代史の大きななぞ。大宝律令（701年）からとの見方が有力だったが、墓誌が本物ならさらにさかのぼることになる。

・・・祢軍（でいぐん）という百済（くだら）人の軍人の墓誌で1辺59センチの正方形。884文字あり、678年2月に死亡し、同年10月に葬られたと記されている。

百済を救うために日本は朝鮮半島に出兵したが、663年に白村江（はくそんこう）の戦いで唐・新羅（しらぎ）連合軍に敗れる。その後の状況を墓誌は「日本餘噍據扶桑以逋誅」と記述。「生き残った日本は、扶桑（日本の別称）に閉じこもり、罰を逃れている」という意味で、そうした状況を打開するため百済の将軍だった祢軍が日本に派遣されたと記していると気賀沢教授は説明する。」以上

ここで問題にしたいのは、碑文の「日本餘噍據扶桑以逋誅」に対する気賀沢教授の解釈である。

気賀沢教授の解釈

碑文の「日本餘噍據扶桑以逋誅」を原文に従って読めば、「日本の餘噍は、扶桑によって、もって誅からにげる。」となる。

「扶桑」は、中国神話で東方にある太陽を生む樹と言われ、同じく東方にある日本をも指す。

「據」は、「依也。引也。援也。拒守也。」（『康熙字典』）。

「逋」は、「亡（にげる）也」（『説文』）。

「誅」は、「小國敖、大國襲焉、曰誅。＜小国おごり、大国これを襲うことを誅という＞」（『晋語』）、「罰也」（『玉篇』）。

しかし、気賀沢教授の「生き残った日本は、扶桑（日本の別称）に閉じこもり」という解釈はどこから出てくるのか？　また「扶桑」を「日本」とすれば、「日本に依って」となり、意味は「日本に守られて」となる。これでいくと語句先頭の「日本」と「国」の意味の詞が重複する。気賀沢教授はこの「日本」の文字を「国号」と考えているようだが、「扶桑」に対応させた「方位」としての「日のもと」と読んだ方が「国」の重複を避けられるのではないか。語の意味としては「東方」となり、語句の解釈は「東方にいる餘噍は、日本に守られ、罰から逃げた。」となる。

「祢軍」とは

次に「餘噍」とは誰かが重要になる。ここでの「餘噍」は、唐側から見て、ある時期に「罪」を犯し「誅（罰）」の対象となったものである。「餘噍」とこれが「誅」の対象となった原因や時期などを特定するには、墓誌全文と関連史料とを見ていく必要がある。

先ず墓誌の主人公である「祢軍」であるが、『日本書紀』にも彼の記事が下記のようにある。

『日本書紀』天智天皇四年（六六五）九月壬辰《廿三》

「唐國遣朝散大夫沂州司馬馬上柱國劉徳高等〈等謂右戎衛郎將上柱國百濟禰軍。朝散大夫上柱國郭務〇。凡二百五十四人。七月廿八日至于對馬。九月廿日至于筑紫。廿二

日進表函焉。〉」
ここの「右戎衛郎將上柱國百濟禰軍」が「祢軍」である。時期としては百済が「唐、新羅連合軍」により滅亡に追いやられた時期にあたり、その中の「白村江の戦い」とは、「日本、百済残党連合軍」と「唐、新羅連合軍」が対峙した一つの戦いである。（結果は「日本、百済残党連合軍」の惨敗に終わる。）

祢軍は、その碑文冒頭に「公諱軍、字温、熊津蝸夷人也。」とあるように百済の人である。続いて「其先與華同祖、永嘉末、避亂適東、因遂家焉。」とあり、その祖先は、西晋末の時に「永嘉の乱」をのがれてきた中国人であると言う。そして百済に臣下として仕え、「曾祖福、祖譽、父善、皆是本藩一品、官號佐平。」とあるように、曾祖父、祖父、父が「佐平」と言う百済で最高位の官職を務めた家柄でもあったと記す。『海外国記』には「・・・百済佐平禰軍」とあり、彼自身も「佐平」の地位にあったものと思われる。
次に、「去顯慶五年（660 年）官軍平本藩日、見機識変、杖劍知歸、似由余之出戎、如金磾之入漢。」＜去る顯慶五年（660 年）、官軍（唐軍）本藩（百済）を平らぐ日、機を見て変を識って、剣を杖つき、（唐に）帰すことを知る。（これ）由余の戎を出でることに似、金磾の漢に入るが如し。＞と碑文にあります。
「由余」は、西戎の人だが先祖は中国人。
「金磾」は、元匈奴の人だが後に漢の臣下となる。
顯慶五年（660 年）とは、百済王（義慈王）とその王子（扶餘隆）が、唐に降り「百済王朝」が滅亡した年で、日本では斉明天皇六年にあたる。碑文での「官軍」とは「唐軍」であり、それに抵抗した「百済」は「賊軍」扱いと言える。そして「聖上嘉嘆、擢以榮班授右武衛滻川府析衝都尉。」＜聖上（唐の高宗）がほめ嘆じて、あげるに、栄班をもってし、右武衛滻川府析衝都尉を授ける。＞と彼は唐の官職を受け、唐の臣下になったことを記す。つまり、祢軍は百済を裏切り唐軍側に寝返ったことになる。この文言の直後に「于時日本餘噍、據扶桑以逋誅。風谷遺氓、負盤桃而阻固。」と今回ここで問題にする語句がある。

原因と時期
碑文に「于時日本餘噍・・・」＜時に、日本の餘噍・・・＞とあるので、時期としてはこの顯慶五年であろう。この時期の『日本書紀』での記述は、

『日本書紀』斉明天皇六年（六六〇）九月癸卯《五》
「百濟遣達率。〈闕名〉沙彌覺從等來奏曰。〈或本云。逃來告難〉今年七月。新羅恃力作勢不親於隣。引搆唐人。傾覆百濟。君臣總俘、略無噍類。・・・
於是西部恩率鬼室福信赫然發憤據任射岐山。〈或本云。北任叙利山〉達率餘自進據中部久麻怒利城。〈或本云。都々岐留山。〉各營一所誘聚散卒。兵盡前役。故以庁戰。新羅軍破。百濟奪其兵。既而百濟兵翻鋭。唐不敢入。福信等遂鳩集同國。共保王城。國人尊曰佐平福信。佐平自進。唯福信起神武之權。興既亡之國。」

『日本書紀』巻二六斉明天皇六年（六六〇）十月
「百濟佐平鬼室福信遣佐平貴智等。來獻唐俘一百餘人。今美濃國不破。片縣二郡唐人等也。又乞師請救。并乞王子余豐璋曰。唐人率我螯賊。來蕩搖我疆場。覆我社稷。俘我君臣。〈百濟王義慈。其妻恩古。其子隆等。其臣佐平千福國。弁成。孫登等。凡五十餘。秋於七月十三日。爲蘇將軍所捉。而送去於唐國。蓋是無故持兵之徵乎。〉而百流國遥頼天皇護念。更鳩集以成邦。方今謹願。迎百濟國遣侍天朝王子豐璋。將爲國主。云云。
詔曰。乞師請救聞之古昔。扶危繼絶。著自恒典。百濟國窮來歸我。以本邦喪亂靡依靡

告。枕戈嘗膽。必存拯救。遠來表啓。志有難奪可分命將軍百道俱前。雲會雷動。俱集沙喙翦其鯨鯢。嘔彼倒懸。宜有司具爲與之。以禮發遣云云。〈送王子豐璋及妻子與其叔父忠勝等。其正發遣之時。見于七年。或本云。天皇立豐璋爲王。立塞上爲輔。而以禮發遣焉。〉」

（長文となるので、この読みは岩波文庫などの『日本書紀』注釈本を参照されたし。）

ここに、百済が滅亡し、その王族の一員である福信が百済残党のリーダーとなり、唐、新羅連合軍に抵抗活動を続け、日本側に、日本にいる「王子豐璋」を迎えて百済王とし、亡国を復興することや援軍を求め、斉明天皇がそれらを決定するまでが記述される。つまりこの時期は 660 年であり、 663 年の「白村江の戦い」の前と言える。

また唐側史料と言える『資治通鑑』「巻二百唐紀十六高宗上之下」に、「主上欲滅高麗、故先誅百済」とあり、その原因と「誅」の対象は「百済」であることが簡潔に述べられる。「百済」と言ってもその具体的対象は人民ではなく、勿論国の主権者たる王や王族やそれに忠誠を誓う臣下達である。

「餘噍」とは

先に引用した『日本書紀』のところに（赤字部分）、「傾覆百濟、君臣總俘、略無噍類。」＜百済をかたぶけ覆し、君臣みなとりことなり、ほぼ噍類（のこれるたぐい）無し。＞とあり、碑文の「餘噍」とは、百済の「君臣」の残族であると推定できる。また「書紀」の「福信赫然發憤據任射岐山・・・唐不敢入」は、碑文の「風谷遺氓、負盤桃而阻固。」＜風谷の遺民、盤桃を負いて阻固なり。＞に対応するであろう。

結論

結論としては、碑文の問題語句の「時期」は、 660 年斉明天皇六年であり、「餘噍」とは、当時日本にいた百済の王族や臣下達である。よってその解釈は「時に、東方にいた百済の王族やその臣下達は、日本に守られ、罰をのがれた。」であり、朝日新聞に掲載した気賀沢教授の解釈は恐らく誤読であろう。

余談

今回の墓誌碑文で個人的に興味を抱く部分は、問題にした部分ではなく、「遂能説暢天威、喩以禍福千秋、僭帝一旦称臣。」＜ついによく天威を説きのべ、喩えるに禍福、千秋（将来）をもってすれば、僭帝も一旦に臣を称す。＞と言う文言である。ここの「僭帝一旦称臣」の「僭帝」はマザコンと思える天智帝か。

※この記事に関する問い合わせ先： mkpo33@auone.jp